

JOMA 通信

Japan Overseas Missions Association



海外宣教連絡協力会

広報 No.61号

北京オリンピックに見た人材交流力

JEA 総主事 具志堅 聖

世界中が注目した北京オリンピックが先日無事に閉幕しました。各国のアスリートが国の威信をかけて競い合い、さまざまなドラマが生まれ、多くの視聴者に感動を与えてくれました。式典の演出や競技中のマナーなどに関して文化の違いが見られ、批判の声もあがりましたが、国際大会（交流）ではある程度受容しなければならないことだろうと思ったことでした。

さて、今回のオリンピックで一つ顕著な現象がありました。それはオリンピック競技の強化のために、さまざまな国のチームにおいて外国人コーチが活躍していたことです。特に開催地である中国のチームがそうでした。今回、中国は金メダル獲得数第一位を得ましたが、その背後に外国人コーチの活躍があったと言われています。中国は今回の北京オリンピックのために、世界16カ国から優秀な38名の外国人コーチを招聘し、早い段階において彼らから先進的な指導を受け、競技の質を高めました。それゆえに輝かしい結果を残すことができたのです。

その中には日本人の指導者が複数存在しました。中国では井村雅代氏がシンクロで、竹内伸也氏がマラソンでコーチとして指導し、活躍しました。また、中国のみならず、スペインではシンクロで藤木麻祐子氏。韓国ではマラソンで村尾慎悦氏。アメリカではレスリングで八田忠朗氏が指導者として選手強化のために尽力しました。国を越えた人材交流力が今回のオリンピックの明暗を分けたと言われています。

今日、国境を越えて人びとが自由に行き来し、文化交流しながら新しい実りを得るという試みが行われています。それはオリンピックだけ

でなく社会のあらゆるところで展開しています。そして、私たちの教会とその宣教も同じ文脈に置かれてい



ます。世界での宣教は海を越えたところで展開されているだけでなく、私たちの傍でも展開されるものと、その様子が変わりました。世界中の人びとが近くに接する時代となった今日、一つの国の独自性のみを重視するのではなく、他国の視点・経験・人材・先進技術などを取り入れ、融合させ、発展させていく力が、教会においてもますます求められていこうと思っています。

A.E. マクグラス氏はグローバル化が進む21世紀に立つ教会に次のように提言をしています。「…グローバルなキリスト教の形を変える可能性がある。…（けれども）理解しておかなければならない重要な点は、キリスト教が決して恒久的な制度的形態に『凍結』しているのではなく、新しい歴史的・社会的背景を持ったところに移ったり、馴染みの（しかし、変化しつつある）状況の諸問題に順応することで、成長し、適応し、発展していることだ」と。グローバルな適応力をもつ人材の確保が急務といえるでしょう。

どんな対策があるのでしょうか。外国人キリスト者指導者の協力や、豊富な異文化経験をもつ元宣教師の方々の力の再活用を視野に入れるべきだと思います。他にない彼らの賜物や経験を用いていただきながら、この時代にふさわしい教会の宣教力を高める。そのことを北京オリンピックでの中国の躍進の中に垣間見る思いがしました。今日の「危機の時代」に御国の進展を見る、そのようなビジョンを持つためにも、あらゆる方法を考えていきたいものです。



世界の地域特集5 トルコ

<教会事情>

この国の人からキリスト教からイメージすることは、観光遺跡（黙示録の7つの教会など多数）、十字軍、ギリシャ正教（総本山がある）、お金持ち（かつてクリスチャンのギリシャ人は裕福であった）、プロテスタント教会＝アメリカ、CIAの手先、等です。知識階級や温厚なイスラム教徒はキリスト教に寛容ですが、偏狭的イスラム教徒、政治的プロパガンダを狙う人たちはマスコミなどを誘導し、キリスト教に対して恐怖心を抱かせるように仕向けてきた経緯もあります。時折起る教会リーダー（牧師、神父、宣教師ら）襲撃事件は、社会不満の標的として起る場合もあります。反キリスト的内容は出版物やネットで流され、過激派の暴力行為をあおります。こうした過激派はごく一部ですが、狙われる対象が明確であるため、教会も宣教より守りの姿勢になりやすいのです。宗教的集会をする場合、政府の認可が必要ですが、様々な条件を満たすことは大変です。そのためプロテスタント教会（7割は宣教師による）は無認可教会（家の教会）のほうが公認教会より多いようです。把握できているプロテスタント教会は約70、クリスチャン数3000人、最も信者数が多い



のがギリシャ正教、その他カトリック、アルメニア正教などを合わせて、クリスチャン人口は国民の0.3～0.6%です。

<社会・宗教・生活>

民主主義、政教分離、人権尊重を掲げる国家ですが、実際は異なることも多々あります。そのときの政権党によって、イスラム色強化と軌道修正を繰り返しています。建国の父アタチュルク（政教分離主義者）を悪く言うと不敬罪、イスラム女性のかぶりものは学校や役所など公の場では禁止など、イスラム国家から見れば世俗国家ですが、社会にはイスラムの行事、習慣が



浸透しています。身分証明書登録の義務があり、死亡の際はそこに記載した宗教により葬儀する法律であるため、99%の人は日本のコンビニのごとく町内会にあるイスラム教の寺院（ジャミイ）で葬儀を行うこととなります。他宗教に改宗した場合は、書き換えればその宗教で葬儀を行えますが、回心者が公的な書類に他宗教を明記することは社会的に困難もあるせいか、書き換えるクリスチャンは少ないようです。

貧富の差は激しいです。しかし元来華やかな文化歴史を刻んできたこの国の人たちは、派手好き、見栄っ張りの傾向があり、中流階級の人たちは実収入以上の生活をしているようです。ここ数年でクレジットカードが目覚しく普及し、分割払いによって何でも購入できるかのような宣伝も目立ち、カード地獄にはまっている人々も少なくないと聞きます。ガソリンは1ℓ350円で、車も高いです（トヨタカローラ約350万円）。しかし首都圏は連日交通渋滞です。車を乗り回し、夏は別荘やリゾート地で過ごし、夜は遅くまで遊び、朝は遅くまで寝ていることが中流階級の証明でもあるかのようです。しかし平均的な月給例が私立高校教師15万円、警察官17万円という中、収入と支出のバランスはどうなっているのか定かではありません。それゆえ賄賂が当たり前の官公庁、人をだましてお金を得ることに罪悪感を抱かない人たちにも遭遇します。

<宣教の機会と可能性>

まず言葉と文化を習得し、生活の土台を作り、出会った方々と信頼関係を築き、自分たちがクリスチャンであることを明確にし、相手に関心を抱いてきたら証しすることから始まります。



歴史的に特別に親日であるため、日本人に対する第一印象がよいことは感謝です。主が日本人へ特別な期待をされているように思えます。日本文化の紹介や芸術活動を通して、聴衆や共演者などの関係者に福音を伝えることがひとつの方法です。ビジネスを通して証ししてゆく道もありますが、「正直者は馬鹿者、お金ですべて解決する」という価値観のこの国では容易なことではありません。日本の商社、企業活動も数多くはありません。しかしチーズケーキのお店をしているグループもあり、主の働き人はそれぞれ賜物を活かして活動しています。大人から子供にまで好かれるキャラクターや、料理等の趣味も現地人との関係作りに生かされますので、このような活動を考えるとき、都会のアパート暮らしよりも、もっと人の集まりやすい環境が望ましいです。しかし活動してゆくことには様々な経費もかかり、ある種のことは日本以上に消費が必要なこの国で、思うように行動できない現状の壁もあります。現地教会での協力奉仕、牧師たちとの交わりを通して、この国の教会事情、イスラム教徒へのアプローチなどを学びつつ、主に愛されている失われた魂を求め、さらに多くの機会を祈る日々です。

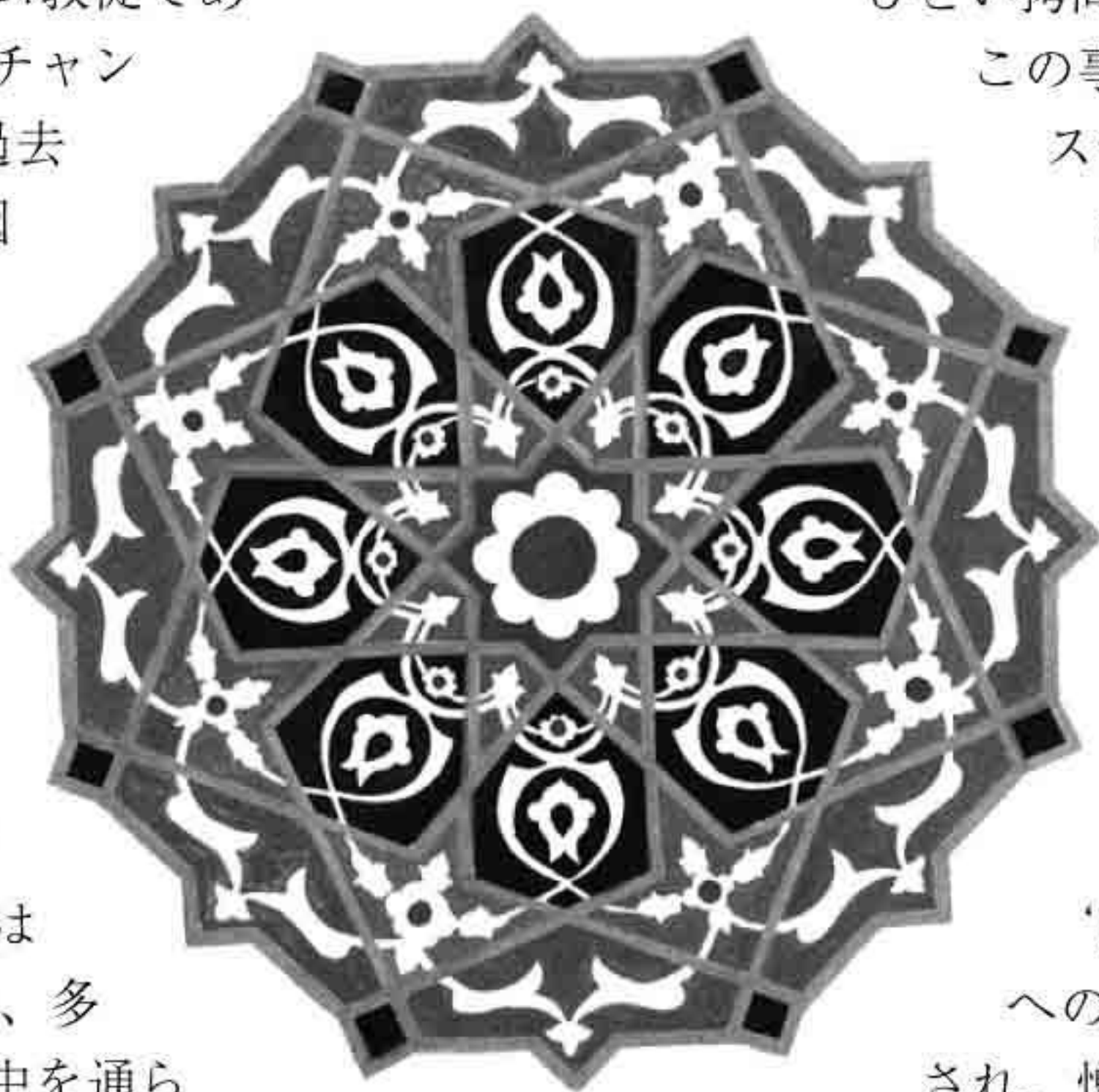


一致団結するクリスチャンたち

ヨーロッパとアジアを跨ぐ国、トルコ。ここにやってくる観光客の多くがこの国の豊かな歴史、文化、人々に魅了される。一方では、現実の社会の中に違った一面もみえてくる。

99パーセントがイスラム教徒であるこのトルコでは、クリスチャンに対する偏見が根強い。過去の十字軍の歴史もその原因の一つだ。その為、宣教師は悪い動機をもって西から送られてきたスパイで、クリスチャンは政治的戦略により国を分裂しようとしている敵、と思われてきた。

こういった背景の中、プロテスタントの福音宣教がはじまった40年ほど前から、多くのクリスチャンが苦しい中を通らされた。信仰の故に、投獄、尋問、差別、失職、離婚、勘当・・・などといったことが繰り返されてきた。しかし、こういった迫害は彼らの信仰をますます強いものとした。そして何よりも、クリスチャンとしての立場がこの国で認められるように闘ってきた。トルコのプロテスタント教会はまだ正式に政府に公認されていない。その為、会堂用の敷地購入、建設、又、



礼拝場の賃貸といった公的な手続きをする際、多くの問題が生じ、その度に裁判へ持ち込みながら権利を主張してきた。

2007年4月にトルコ南東部マラティア市で3人のクリスチャンが5人の大学生によってひどい拷問を受けた後に殺害された。

この事件はトルコと世界のクリスチャンに大きな衝撃を与えた。現在この事件の裁判は進行中で、多くの人の注目を集めている。今、彼らを殺したこの若い青年たちの背後にある真の仕掛け人達の存在が少しずつ明るみに出てきている。これまで、‘トルコの国民性の侮辱’、‘国の一致をみだすもの’ ‘神への冒瀆’ などとして、非難され、憎悪されてきたクリスチャン

達はこの事件をきっかけに一致団結し、偽りと悪が暴かれる為にこれまでになく強い祈りへと導かれている。どうか、この事件の真相が主の偉大な働きによって明らかにされるように、クリスチャンに対する偏見が少しでも払拭され、憎悪が減るように、このイスラムの国でクリスチャンの存在が受け入れられ、キリストの体である教会が自由に主を礼拝できるように祈ってください！



エペソの遺跡

JOMA通信では特集を組み、世界各地における宣教の状況と必要を順次お伝えしていきます。次回は南アジア地域を取り上げる予定です。事務局から原稿依頼をさせていただく他、各加盟団体からの記事を募集しております。南アジア地域における宣教情報をお持ちでしたら、ぜひ事務局までお寄せ下さい。



JOMA宣教セミナー報告

JOMA 役員 関 昌宏 (チャーチ・オブ・ゴッド国外宣教部)

4月15日の総会時に関西ミッションリサーチセンターの正木牧人師をお迎えしてセミナーが持たれました。テーマは

「世界宣教における日本の教会の位置づけ」 ～ローザンヌ世界宣教運動からの提言～

でした。

先生の所属する関西ミッションリサーチセンターは1974年の第1回ローザンヌ世界宣教会議以来その翻訳出版や講演会等で用いられてきました。

先生はその経験を生かして①ローザンヌ世界宣教委員会が今日の世界宣教の使命をどのように考えているか、②世界宣教の中で日本の教会がどのような位置づけにあるかを語ってくださいました。以下その要約を記します。

① 1974年のローザンヌ世界宣教会議で署名された「ローザンヌ誓約」は、伝道とキリスト者の社会的責任の両方をバランス良く強調し、その後の福音派のあり方に大きな影響を与えてきました。しかし次第に運動は縮小していったのですが、2004年の「ローザンヌ・フォーラム2004」以降復調し、現在では2010年の第3回世界宣教会議開催に向けて備える機運が高まっています。ローザンヌ運動は「全福音を、全教会が、全世界へ」という標語を掲げてきましたが、世界宣教のチャレンジを神学的に考えていく上で七つの分野を特定できると考えています。

I 新しいキリスト教世界の均衡

これまでとは違う現実に沿った新しい世界的な平衡を教会が発見し、慣れていく必要があります。

II 教会の悔い改め

どれ程の人が聖書を第一にしているか、聖書に



よって現実を把握しているか。

III キリストの独自性

ポスト・モダンの多元主義的世界におけるキリストの独自性とキリスト教の真理性主張について。

IV 苦しみの神学

世界の貧しさやテロ、エイズ、危機に瀕する児童等苦しみの現実を直視し、そこに提示できる十字架の神学を構築していくことが求められる。これは今日麻薬のように拡がる「繁栄の神学」への解毒剤ともなり得る。

V 勢力の伸張が著しいイスラム世界にどう対応していくのか

VI 全世界を宣教地として見、使命がまだ終わっていないことを認識する

イスラム、ヒンズー、仏教徒へのアプローチ、障がい者、

文字の読めない人々への伝道、ディアスポラ、青年文化等諦めずにじっくりと取り組むべき課題です。

VII メディア革命の活用

メディアは世界規模のコミュニケーションや価値観に大きな影響を与えています。否定的、破



壊的な影響を防ぎながら、肯定的、建設的な潜在能力を特定し、開発し、福音宣教に役立てていく必要があります。

② 世界宣教の中での日本の教会の位置づけを考える手がかりとして数年ごとに開催されているアジア・ローザンヌ宣教会議の視点を紹介します。

アジアの特徴は、極端な多様性を有することです。それは言語、宗教、文化の領域で顕著です。こうしたなか、これまでも明確な宣教理解を持って次世代を訓練していくことや、ホリスティックな宣教理解で人々の必要に答える姿勢、また文化的威圧をなくすため、セル教会の方策などが提言されてきました。現在アジアの宣教は確実に進展しています。今後も神の力に

より頼んで犠牲をいとわずに出て行くことが求められます。日本の教会は数ではなく、質のインパクトを必要としている今日の世界にあって、福音の本質に基づく宣教論を構築することにより、世界に貢献することが可能です。今日力づくの宣教では効果が上がりません。ポスト・モダニズムや共同体のしがらみといった点も皆私たち日本人が経験してきたことであることを思うと、日本発の「苦しみの神学」をもって世界に貢献していくことができるのです。

今回の講演を通じて現在の世界宣教の方向性と日本の教会の立ち位置が確認できたことは幸いでした。宣教の主に期待しつつ、世界宣教に資する教会でありたいと願わされました。

☆☆宣教インフォメーション☆☆

カイロスコースのご紹介

Kairos

日本で四回目

一昨年、福岡において日本で最初のカイロス・コースが開かれ、昨年は大阪で第二回が開催されました。また今年5月から7月にかけて関西聖書学院において授業の一環として開催されています。このたび第四回カイロス・コースが大阪で開催されます。神様が創造の初めから持っておられた宣教のビジョンを共に学び、そのビジョンを実現するために教会としての、また個人としてのビジョンをご一緒に見出しましょう！

カイロスとは、

神がご自身の計画を実現するために、世界中でどのように働いておられるのかを発見するダイナミックな学びです。今世紀における戦略的世界宣教の中へ、クリスチャンや地域教会を教育し、動員することを目的としています。

カイロスでは、

- ◆ 創世記から黙示録に織り交ぜられた宣教の糸を発見します。
- ◆ 繰り広げられる世界史のドラマを神様の視点から見て、世界中におけるキリスト教の驚くべき前進を垣間見ます。
- ◆ 神の世界的な贖いの計画を完成させるために、

何が残されているか、また世界宣教における達成可能なチャレンジと未開拓の地を探究します。

- ◆ 全世界における神の国の拡大と成長という地上最大の興奮すべき出来事の中でのあなたの役割と働きの中を見出します。

カイロスの歴史と背景

KAIROS カイロス (The Condensed World Missions Course (CWMC) から改名) は、『Perspectives on the World Christian Movement』(世界宣教の展望)と、3巻から成る『World Missions』(ジョナサン・ルイス著)に基づいて、フィリピンのリビング・スプリング・インターナショナルによって開発されました。CWMCは当初フィリピンで用いられるために作られ、1994年に初版が作成されてから、1万人以上のフィリピン人がこのコースを受けました。フィリピンの教会を世界宣教に対して刺激し、教育し、動員するために大きく貢献しています。現在、KAIROSは他の国々においても積極的に取り入れられ、アジア、アフリカ、ヨーロッパ、オーストラリアなど25カ国でこのコースがもたれています。

コースの内容

聖書的背景

1. 神様の目的と計画
神様のみこころの中心に宣教があることを聖書か

から見出す。

2. 契約の民、イスラエル

イスラエルを通してご自身の目的を成就するという願いの中で、神がどのようにイスラエルの国を取り扱われたかを見る。

3. メシヤ、メッセージ、とメッセンジャー（救い主、福音、宣教師）

新約聖書の時代に移っても、神の中心的目的は、すべての国々に対するみこころである。

歴史的背景

4. ワールド・クリスチャン・ムーブメントの拡大
初めから現在に至るまでのキリスト教の前進をたどる。

戦略的背景

5. 宣教の戦略

キリスト教の世界宣教における戦略の位置付け、価値、性質とは。

6. 残された働き

残されている宣教の働きと、どこに、どのような未伝道の民族の大半がいて、どのような方法で彼らに福音を届けるかを見る。

7. ワールド・クリスチャンのチームワーク

戦略的な世界宣教を成し遂げるために教会全体が関わることのできる、また関わらなければならない、様々な方法の紹介。

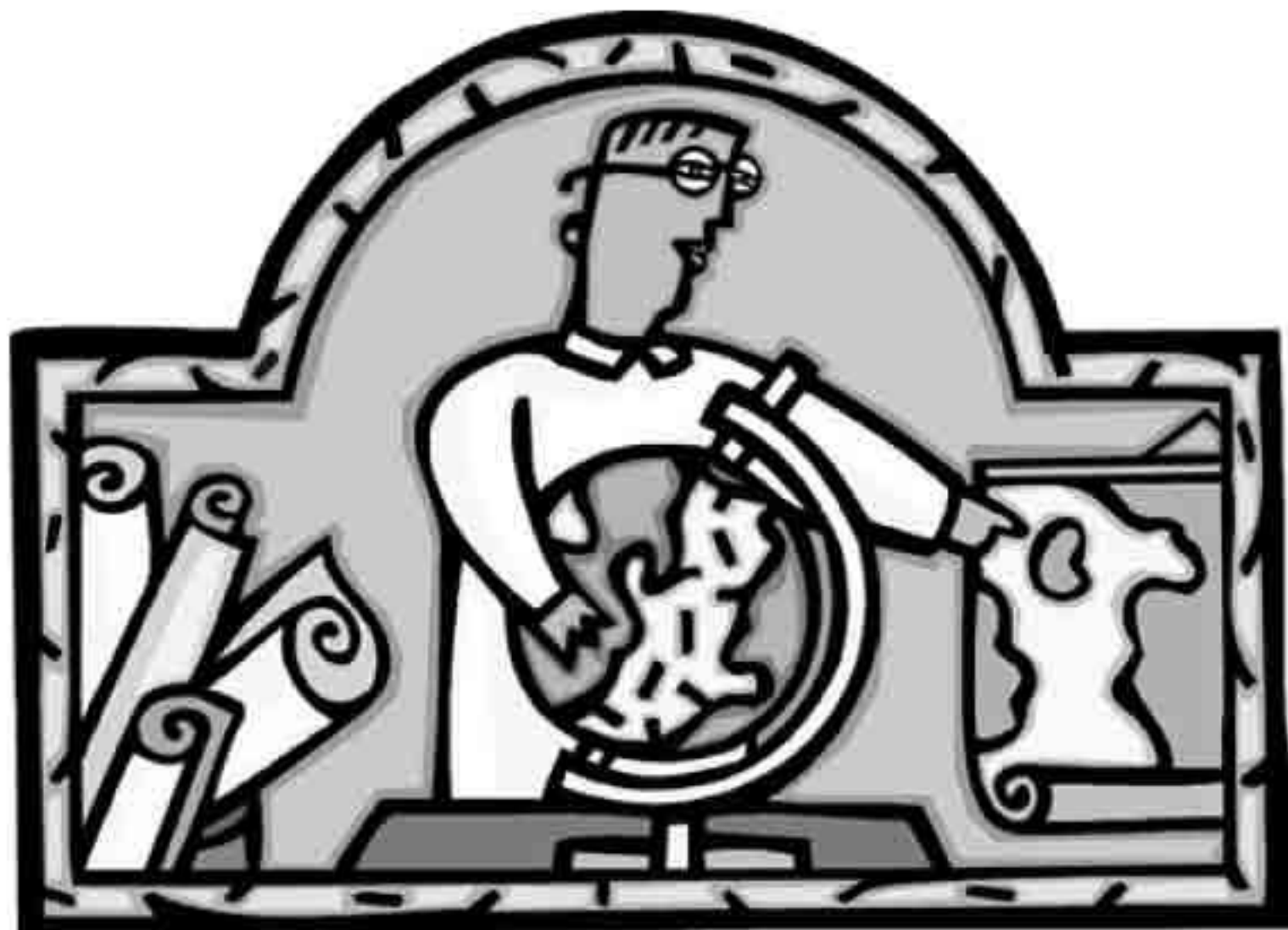
8. 適用と調整

ビジョンを得たあと、いかにしてそれを維持し、守り行えるかを考える。使命を受けてからの各個人の適用のステップを考える。

文化的背景

9. 異文化への考慮

異文化における成功する同一化や、その他の要素について。教会の文脈化、また宣教の働きと密接に関係する要素について。



推薦します！

昨年ジーザス・ファミリーでもたれたセミナーに出席した妻が珍しく興奮して話されました。「理論だけではなく実践している教会で“日本の教会でもこんなことができるんだ”の励ましを受けた」とのこと。最高の評価を聞いた私は早速、学院の授業に取り入れました。この学びは宣教の最前線である未伝の部族への到達を具体的に追及するものですが、同時に世界最大の least reached people 日本への宣教攻略の指針を与えるものです。受け身の授業では終わらず、読み、考え、分かち合い、祈るプロセスで宣教意識が戦略的に研ぎ澄まされ、主の思いに一つにされ、信仰が生活化されていきます。日本が世界宣教に貢献する宣教大国になる非常に大切な鍵を与えてくれるこのセミナーへの参加を心からお勧めします。

大田祐作師（関西聖書学院・学院長）

カイロス大阪のご案内

コース日程： 2008年10月20日（月）－24日（金）

場所：ジーザス・ファミリー・センター

〒545-0014 大阪市阿倍野区西田辺町1-2-2

コース費用（当日徴収）：

- a. ホテル宿泊希望 32,000円
（宿泊、食事、教材、セミナー費含む）
宿泊：シティ・イン西田辺/シングル・ルーム（朝食付き）
（ジーザスファミリー・センターより歩1分）
- b. ホテル宿泊なし 12,000円
（食事、教材、セミナー費含む）

注）セッションは、毎日9:00－21:00までです（初日は12:00より、最終日は15:00まで）。部分参加はできません。

通われる方は、すべてのセッションに参加できるように、ご調整ください。

定員：20名（定員になり次第、締め切らせていただきます）

締め切り：10月10日（金）

教材：セッションは日本語で行ないます。

申し込み：ジーザス・ファミリー・センター

問い合わせ先： Tel. 06-6697-3502

Fax. 06-6697-3504

e-mail. jesusfamily@k2.dion.ne.jp

主催：カイロス・ジャパン

協力：JOMA（海外宣教連絡協力会）

事務局：ジーザス・ファミリー・センター



新規加盟団体の紹介

東京フリー・メソジスト教団宣教委員会

私たちの教団は、戦前にアメリカのフリー・メソジスト教団から夫婦で派遣されて日本宣教に携わり、戦後、未亡人となった後も日本宣教への熱い思いを持って、63歳の時に単身で再来日した女性宣教師が、1950年から東京の荻窪で働きを開始したことに端を発します。そして1953年に武蔵小金井に最初の教会が建設されました。また1962年には、初めての宣教師を台湾に派遣したことがきっかけとなり、宣教委員会が発足しました。

それ以降、今日までタイ、ブラジル、北米に教団からの宣教師を派遣してきました。

さて、今日、教団の宣教委員会では、以下のことを目指した活動に取り組んでいます。

○ 現在、教団から派遣されてタイ・チェンマイの日本語キリスト教会牧師として奉仕している野尻孝篤・明子師を祈りと財政面で支援する働き。

○ 教団に連なる9教会の会員を主たる対象とした宣教ニュースの発行。

内容は牧師の執筆による聖書から学ぶ世界宣教、野尻師夫妻からの報告、各教会における

宣教活動の取り組みの紹介、などです。年に3～4回発行しています。

○ 世界宣教のための祈祷課題を祈りあう合同宣教祈祷会。

定例の委員会は、上記活動の推進のために、各教会から選出された委員によって、隔月に1度の割りあいで行われています。

なお、当教団はアジア・太平洋フリー・メソジ

— JOMA加盟団体 —

LMI世界宣教会

OMFインターナショナル日本委員会

OM日本

アンテオケ宣教会

インマヌエル総合伝道団 国外宣教局

チャーチ・オブ・ゴッド国外宣教部

基督兄弟団海外宣教委員会

在欧日本人宣教会

東京フリーメソジスト教団宣教委員会

南米宣教会

日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団海外伝道部

日本イエス・キリスト教団

日本ウィクリフ聖書翻訳協会

日本バプテスト教会連合

日本ホーリネス教団

東洋ローア・キリスト伝道教会海外宣教委員会

ミラノ宣教支援会



タイへ派遣されている野尻 孝篤・明子師

スト宣教協力会（APFMMA）にも加盟し、アジア各国のフリー・メソジスト諸教会とも交流の場を持ち、経済的支援にも取り組んでいます。

この度、野尻宣教師夫妻の働きを、日本の諸教会・諸団体でも祈っていただきたく願ひ、JOMAに加盟を申請し、今年4月のJOMAの総会で、加盟を承認していただきました。

これからよろしくお願ひ申し上げます。

水口 功

（東京フリー・メソジスト教団 宣教委員会委員長）

2008年度役員紹介

会 長：横山基生（在欧日本人宣教会）
副 会 長：内村保（日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団海外伝道部）
書 記：関昌宏（チャーチオブゴッド国外宣教部）
会 計：酒井信也（OM日本）
JEA 担当：永井敏夫（日本ウィクリフ聖書翻訳協会）
オブザーバー：具志堅聖（JEA）



発 行：海外宣教連絡協力会

発 行 者：横山 基生

住 所：〒244-0842

横浜市栄区飯島町2441-10

Tel.045-891-7769

Fax.045-894-2121

e-mail: jomaoffice@yahoo.co.jp

ホームページ: www.joma.mydns.jp

郵便振替：海外宣教連絡協力会

00160-7-106631